



小田小だより

平成27年 3月号

〒236-0052 横浜市金沢区富岡西1丁目69番1号 TEL.045(775)3011
<http://www-local.edu.city.yokohama.jp/sch/es/koda/>

横浜市立小田小学校



「辛抱」

～3・11と卒業に思いを寄せて～

学校長 木村 昭雄

風は冷たいものの梅の花も満開になり、日の光が眩しく感じられる今日この頃です。

早いもので弥生3月を迎え、東日本大震災及び福島原発事故が発生し、多くの尊い命が失われた日からもうすぐ4年が経とうとしています。改めて、犠牲になられた方々に心より哀悼の意を表します。これからも3・11の記憶を風化させることなく、被災地の方々に心を寄せ、その復興に向けた取り組みを自分ごととして捉えなければならぬと強く思いながら、本年度最後の学校だよりを書いているところです。

最近では温暖化の影響で冬といってもそれほど寒くはなくなりました。しかし、私が小学生の頃住んでいた山形県大蔵村の冬は、大変寒く氷点下十度以下になる日が何度もありました。氷点下十度では、濡れたタオルが見ている間に凍ってしまいます。また、そんな日は「吹雪」といって、息もできないくらいの強い風と雪が横から吹き付けてきます。ですから、家の中でじっとしています。そんな日が2～3日続くと昨日までの天気が嘘のようにぴたっと止み、時には月に2～3度くらいしかない青空が見ることがあります。そうすると、人々はモグラのように軒下まで雪で埋まった家からごそそと出てきます。そのような日が何ヶ月も続くのですが、村の人たちは陽気です。といっても普段は無口な人が多いのですが、夏のお祭りとか盆踊り、村民運動会の時などは大いに盛り上がりエネルギーを発散（しんぱう）します。特に厳しい2月の冬の間は、みんながもうすぐ来る春を想い、じっと辛抱しているのです。



ところで以前、NHKで、アメリカに移住した日本人が強制収容所で生活した時のことをドラマ化した番組を見たことがありました。当時移住した人たちは「ジャップ」と差別されることもありましたが、懸命に努力し、中には農園を手に入れる人も出てくるなど、やっと生活のめどが立ち始めます。ところが、ちょうどその頃、日本とアメリカの間で戦争が始まり、移住した日本人は、財産を全部没収され砂漠の強制収容所に入れられてしまったのでした。そこは、草木が少ないばかりか冬はとても寒さが厳しい土地でしたが、人々はくじけず砂漠を畑に変えたり、日本庭園を造ったりしながら辛い日々を乗り越えました。その当時の人たちが作った生活用品を展示した別の番組も見ましたが、その中に、まるで桜の花が咲いたかのような綺麗な「かんざし」がありました。それは、地下三十～五十センチメートルくらいまで掘らないと出てこない小さな貝殻を集めて作られたものでした。どれだけの手間と時間を費やしたのでしょうか。テレビに映し出されたその展示会の看板には“SINBOU”と書かれていました。厳しい環境（つら）の中でも、みんな希望をもって生きてきたことをこの「かんざし」は物語っています。「辛抱」とは、「辛さを抱える」と書きますが、「辛さ」だけではなく、「希望」も抱えることが「辛抱」なのだと教えてくれます。冬の寒さも強制収容所の厳しさも乗り越える力は、必ず良くなるという「希望」を失わないことだと思うのです。

今年度も残すところあと僅かとなりました。保護者の皆様、地域の皆様にはいろいろな場面で大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。

いよいよ3月20日は「第24回卒業証書授与式」の日です。卒業生の皆さん一人ひとりが、たとえ「辛さを抱える」ときがあっても、「希望」も抱え、自らの力で前に向かって進み続けますようにと念じつつ証書を渡したいと思っております。